

6次産業化事例を研究

若手農業者の実践塾開講

農振公社と県

農業の新たな価値創造とビジネス化を目指す若手を育成する「とちぎ6次産業化実践塾」が6日、宇都宮市一の沢2丁目のとちぎアカリプラザで開講した。県内の20〜40代の農業者が来年2月まで

6回にわたり、商品設計や販路開拓などの講義を受け、6次産業化の先進事例を学ぶ。県農業振興公社と県が本年度初めて開催。6次産業化に既に取り組んでいるか、これから取り組もうとしている

農業者27人が受講する。同公社の吉沢崇理（よしかた たかし）理事長が「地域の特性と皆さんの技術を生かしながら新しい農業の方向をつくり、活性化につなげればありがたい」とあいさつ。塾長

を務めるファーマーズ・フォレストの松本謙社長が「売れる商品づくり」をテーマに講義し、「お客が手に取りたくなる、買いたくなる、食べたくなる動機づけが重要」と強調した。

塾に参加した小山市



若手農業者が参加し開講した「とちぎ6次産業化実践塾」―6日午後、宇都宮市内

の農業生産法人いちごの里湯本農場の小黒弘征さん（30）は「ウェブによる販売戦略に関心がある。商品開発でいいアイデアがあれば生かしていきたい」と話していた。